令和８年度

広島平和記念式典中学生派遣事業

報　告　書



川　越　市

事業の概要

１　目　　的　　未来を担う若者を被爆地広島へ派遣し、広島平和記念式典への参列、広島平和記念資料館や原爆ドームの見学を通して、平和の尊さ大切さを学ぶことを目的とする。

２　日　　程　　令和８年８月５日（水）から７日（金）　２泊３日

３　派遣人数　　２２名

４　選出方法　　各市立中学校から校長推薦により生徒１名を選出

５　対象学年　　第２学年

６　説 明 会　　令和８年７月２４日（金）午後１時３０分から

７　平和を考える集い　　令和８年８月２２日（土）午後１時から
　市立博物館　視聴覚ホール

８　感 想 文　　報告書として編冊し、派遣生徒及び学校へ配布。
　令和９年度の原爆写真展の際に展示。

日　　程

【説　明　会】　令和８年７月２４日（金）

時　間　　午後１時３０分～午後３時３０分

場　所　　市役所７階第１・第５委員会室

内　容　　市長あいさつ、自己紹介、事業説明、班別交流

【派遣１日目】　令和８年８月５日（水）

６：２０　東武東上線川越駅改札口集合
６：３９　川越駅出発
８：４８　東京駅出発［のぞみ 63 号］
１２：４２　広島駅到着
１４：３０　平和記念公園見学（平和記念公園及び平和記念資料館等）
１７：１５　平和記念公園出発
１７：３０　ホテル着

【派遣２日目】　令和８年８月６日（木）

６：３０　ホテル出発
７：００　平和記念公園到着　式典受付
８：００　平和記念式典　開会
８：５０　平和記念式典　閉会
１３：３０　広島県 JA ビル到着
１４：００　平和学習受入プログラム
１７：４０　ホテル到着

【派遣３日目】　令和８年８月７日（金）

９：３０　ホテル出発
１０：００　広島駅到着　広島駅構内にて自由行動
１１：０３　広島駅出発　［のぞみ 96 号］
１４：５７　東京駅到着
１６：３０　川越駅到着　解散

【平和を考える集い】　令和８年８月２２日（土）

時　間　　午後１時～午後４時

場　所　　市立博物館視聴覚ホール

内　容　　意見交換会、体験発表、講演

参 加 者 感 想 文


令和8年8月6日 広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式
AUG．6．2026 HIROSHIMA PEACE MEMORIAL CEREMONY

８１年目のバトン

川越第一中学校

私は川越市の中学生派遣事業に学校の代表として参加し、広島平和記念式典に参列しました。原爆が落とされてから、もう八十一年という本当に長い年月が経ちました。これまで私にとって、戦争や原爆は歴史の教科書の中にある遠い昔の出来事で、どこか現実のこととしてしっかりと考えることができていませんでした。しかし、実際に自分で広島の地に立ち、平和記念公園や平和記念資料館を訪れたことで、その考えはガラリと大きく変わりました。

特に、資料館の中で目にした被爆した直後の生々しい写真の数々や、あのつらい状況を生き残った人たちの生々しい言葉は、私の想像をはるかに超える悲惨なものでした。当時の人たちの恐怖や苦しみがそのまま伝わってくるようで、見ていて本当に胸が締め付けられる思いがしました。今の私と同じように、毎日友達と笑い合い、未来の夢を持っていた多くの中学生が、一瞬にして命や大切な家族、そしてすべての日常を奪われたのです。

式典で響き渡る平和の鐘の音を静かに聴きながら、私たちが今あたり前に送っている幸せな毎日は、過去のたくさんの犠牲や深い悲しみの上に成り立っているのだと強く肌で感じました。

今回、学校の代表というとても大切な役割をもらってこの事業に参加した私には、大きな責任があります。広島で実際に見て、聞いて、肌で感じた戦争の恐ろしさや平和の大切さを、自分だけの思い出や知識として終わらせては絶対にいけません。これからは、私自身が先頭に立って、学校の友達や地域の人たちに向けて、広島で学んできたことをしっかりと伝えていく活動をどんどん進めていく必要があります。

平和な世界をつくるということは、決して難しいことではなく、周りの人を思いやり、お互いを認め合う小さな一歩からはじまります。二度とあのような悲劇を繰り返さないために、まずは私が広島で知った事実をみんなに伝えていきます。代表としての自覚を胸に、平和な未来をつくる一人として、これからも責任を持って行動していくことを心に誓います。

忘れてはいけない８月６日

初雁中学校

ほぼ晴天に近いちょうど 81 年前の朝、空襲警報が解除され、今日は何をしようか。誰もがそう考えているときに一発の原子爆弾が落とされた。

これから長い長い人生を送ろうとしている人たちの希望と夢が一瞬で消えてしまった。私は小学生のときから戦争に関する本を読んできた。だからヒロシマがどんな被害を受けたか、そして戦争がどれほど恐ろしいものかを知っていた。しかし、ヒロシマへ行くのは今回の事業が初めてだった。

まず、わたしは広島平和記念資料館に行った。そこには原子爆弾が落とされた広島の被害が写真や被爆者の遺品によって生々しく記録されていた。本とは違い、自分がまさにその中にいるように感じた。資料館には、私と同世代の子どもたちの記録もたくさん残っていた。もし、私の友達がある日突然亡くなってしまったら…そう考えると私は現実を受け入れることができずに泣きわめき、生きることさえ困難になってしまうと思う。だから私は、被爆した人の恐怖に負けない強さを実感した。

二日目に爆心地から、2500 メートル離れたところにいた、八幡さんの被爆体験を聞くことができた。八幡さんの話す一言一言から、原子爆弾の恐ろしさが伝わってきた。八幡さんは爆心地から 2000 メートル以上も離れていたのに、原子爆弾の閃光が見え、その後に爆風によって、約 6 メートルも飛ばされたそうだ。熱線を浴びた人は全身にやけどを負い、苦しんで亡くなった。資料館で見た、私たちには想像できないほどの傷を負った人々がたくさんいたことを考えると、恐怖と同時に吐き気さえおぼえた。しかし八幡さんはそんな現実を受け入れ、生き続け、被爆体験を今も語っている。

81 年前、どんなに生きたくてもその願いが無念にも叶わなかった人がたくさんいる。私たちはその人達の思いを継承し、受け継いで二度と同じ事が起きないようにしなければならない。それが日本に生まれてきたことの使命なのかもしれない。

復興した広島の町

富士見中学校

1945 年の 81 年前８月６日午前８時 15 分、たった一発の原子爆弾が広島に投下されました。子供や大人、動物など一瞬にして、尊い命は失われました。私は、現地に行ってもっと平和への訴えや原爆についての知識、その時の日本の状況などについて詳しく知りたいと思い、この広島平和記念式典中学生派遣事業に参加しました。

８月５日から８月７日の３日間で１日目は、広島平和記念資料館と平和記念公園を見学しました。資料館では、入り口の左に地球平和監視時計があり、広島に原爆が投下された日からの日数と最後の核実験からの日数があります。展示のはじめには、原爆が投下されたときの広島のまちの写真がありました。また、当時着ていた服や人々が持っていたものなども展示されていました。そこから進むと次は核兵器の危険性についてでした。原子爆弾の開発から原子爆弾の脅威、核の時代から核兵器廃絶に向けて、そして戦時下の広島のまちと暮らしから被爆体験の継承・伝承まで実際の写真や資料を使って説明されていました。

次に平和記念公園をガイドさんと見学しました。最初に、死没者慰霊碑を見ました。慰霊碑の中には死没者名簿が入れられています。慰霊碑の前には有名な言葉で「安らかに眠ってください。過ちはくり返しませんから」と書かれています。慰霊碑の周りにはトンネルがあり、なぜかというと被爆者の方々を雨や雪などからしっかり守るためです。また、慰霊碑の後ろには平和の灯があります。平和の灯は１９６４年８月１日からずっと燃え続けています。この世界から、核兵器が全てなくなったときにこの火を消すことができます。また、原爆ドームは原爆・戦争の悲惨さを後世に伝え、時代を超えて核兵器が無くなるようにそのままの形で残っています。原爆ドームの近くにある原爆の子の像は被爆した 1 人の女の子の死をきっかけに作られました。原爆で亡くなった子供たちの霊を慰め、平和を築くための像を作ろうという運動が起こり、全国から募金をもとに完成しました。今でも、この像には世界各国から折り鶴が捧げられています。

２ 日目の午前は平和記念式典への参列と午後は全国平和学習の集いがありました。平和学習の集いで、被爆者の方に経験したことを話していただきました。お話しいただいた八幡照子さんは、８歳のときに家族で被爆しました。照子さんは、隣の家に行くため裏庭に降りたときに窓が青白く光り、玄関まで５～６m飛ばされたそうです。お話の中では、戦時中の学校の話や被爆体験の証言者を始めた理由などを教えていただきました。質疑応答の時間で、「核はどうすればなく

なるか」という質問に照子さんは、「地球上で核は増えていく。もしかしたら狂った指導者が使うかもしれないし、使用によっては地球がなくなるかもしれない。だからこそ、話し合うのが大切。国民を守るために話し合いが大事。」とおっしゃっていました。照子さんは、被爆体験の話を正しく伝えてほしいとおっしゃっていました。私たちは被爆体験を直接聞くことができる最後の世代として、当時の歴史の正しい知識を身につけて、考えることが大切だと改めて分かりました。原爆によって、そして戦争によって、もっと生きていたかった、たくさんの人々の命が、一瞬にして失われてしまったという事実から、私たちは目を背けてはならないのです。

　最後に平和とはなんなのか、私は戦争がないことだけでなく、世界中の子供から大人まで笑顔で暮らせることが平和だと思います。私はこの貴重な体験を学校の同級生や地域の人にもっと共有して、平和の尊さについて訴えていきたいです。一人ひとりが今ある日常の大切さや原爆・平和についてなど考えていくことが大切だと思います。そして、平和のために、小さなことでも自分にできることは何かを考え続けていってほしいです。そして、唯一の被爆国である日本から世界へ、平和や命の大切さの訴えになってほしいと思っています。

『未来を担う僕たちの使命』

野田中学校

「平和」ー今まで僕はこのテーマについてあまり深く考えたことがなかった。しかし、この平和記念式典中学生派遣事業を通して、僕の平和についての意識はガラリと変った。そのきっかけとなった出来事は３つある。

１つ目は「平和記念資料館」を訪れたことだ。館内に入るとすでに多くの国々の人がそこにいた。翌日が平和記念式典ということもあったのだろうが、世界中の人々が原爆と平和について関心を持っているのだと感じた。館内の展示には目をそらしたくなるような悲惨な写真や絵などがたくさんあった。その写真や説明の文脈、展示物のひとつひとつから原爆被害の深刻さが伝わってきた。今まで知らなかった戦争というものを肌で感じ、恐怖で心が震えた。今、自分が立っているこの場所で、本当に起こったことだと思うと、やるせない気持ちでいっぱいになった。

２つ目は８月６日に「広島平和記念式典」に参列したことだ。内閣総理大臣をはじめ、被爆者やご遺族、国内外から集まった多くの参列者と一緒に、「平和宣言」「平和への誓い」「ひろしま平和の歌」を、張り詰めるように厳粛な雰囲気の中で聞いた。それらの言葉には、平和への強い思いが込められていて、一つ一つが心に突き刺さってくるようだった。

３つ目は広島平和記念式典の参列後に行った「第２回全国平和学習の集い」に参加したことだ。その中でも特に印象に残っているのは、班の方々と行ったグループディスカッションと被爆された方のお話だ。グループディスカッションでは「自分たちが平和を築くために何ができるか」をテーマに討論し、ひとりひとりの意識・行動が平和に繋がるということを再確認できた。被爆された方のお話では、原爆投下後のリアルな体験談を直接伺うという、とても貴重な経験をすることができた。お話をしてくださった方は、８９歳を迎えるということで、その言葉の重みに圧倒された。

冒頭で述べたように、僕は普段あまり「平和」について考えるということがなかった。８１年前の夏、広島に原爆が落とされた事実を僕はテレビや教科書でしか知らなかった。でも、広島の人たちは幼いころからその教育を受けてきて、戦争を知らない世代にも平和への思いがしっかりと受け継がれている。広島平和記念式典で、広島市長は僕たち若い世代に向かってこう呼びかけていた。「価値観の異なる人々との国境を越えた交流を深め、被爆の実相を学び、自らの思いを発信しその行動の輪を広げていってください。」と。僕たちは、被爆者から直接

話を聞くことができる最後の世代だからこそ、未来を担う者として、日々ある平和を当たり前だと思わず、大切にしなくてはいけない。生まれた場所、育った環境が異なる人とはたくさん対話し、相手の気持ちに寄り添って相互理解を深める。それが広がっていくことで争いのない世界を築いていけると思う。決して、武器を持つことが強いわけではない。原子爆弾という一つの武器によって、たくさんの大切な命や場所がなくなってしまうことを想像しよう。広島で学んだ僕にとって、原爆はもう他人事ではない。これから僕は、友達や家族に広島での経験を伝え、平和への第一歩に貢献していきたい。

「平和への願い」

城南中学校

私は、派遣事業で平和記念資料館見学や平和記念式典に参加させていただき、平和の大切さについて学び、充実した３日間を過ごすことができました。

広島に行き、心に特に残ったことが２つあります。

１つ目は、原爆のすさまじさと戦争は絶対にしてはいけないという思いです。

広島は、明治時代に軍都として栄え、路面電車や洋風の建物がいくつもあり、第二次世界大戦中では、国の司令塔としても使われていました。そんな中、都市の規模や爆風で効果的に損害を与えることができるという理由で、広島に原子爆弾が落とされました。

資料館で見たさまざまな写真や展示、すべてが残酷で言葉では言い表せないほどの衝撃でした。中でも、８時１５分に止まっている時計を見て、平常の暮らしが戦争で壊された悔しさや悲しみ、原爆のすさまじさや残酷さを感じ、戦争は絶対してはならないという思いがさらに強くなりました。

２つ目は、平和のために私たちにできることは何かということです。

平和記念式典で掲げられた平和への誓いの中で「被爆体験を聞ける最後の世代」という言葉がありました。戦後８１年の今、被爆者の方が少なくなってきています。だからこそ、戦争を現実として受け止め、次世代に繋いで平和を創っていくことが大切だと思いました。

今、世界では戦争や紛争が絶えません。平和のために私たちは何ができるか。相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、対話をしていくこと。今、どれだけ幸せに暮らしているのか考えて日頃から感謝を伝えること。平和への思いを自分なりに表現すること。一人一人の小さな行動が、平和への後押しになるということを広島への派遣を通して気づくことができました。

世界が平和になるために、これらの気づきを大切にして生活をしていきたいです。そして、自分が広島で学んだことを周りの人に伝えていき、平和を創る一助にすることができたら嬉しいです。

「平和への祈り」

芳野中学校

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、一発の原子爆弾が広島に落とされ、建物や生活、人々の大切なものをすべて破壊しました。
私は原爆について教科書やニュースで学んだことしか知りませんでした。しかし、あの日被爆した人々はどんなにつらい思いをしたのか。生き残り、大切な人を失った人々は何を思いこれまでを過ごしてきたのか。そして、あの悲劇をもう二度と繰り返さないためにできることは何か知りたいと思い、派遣事業に参加しました。

一日目、広島平和記念資料館を訪れました。資料館に入ると教科書だけでは分からない、原爆の悲惨さを物語る多くの資料が展示されており、思わず言葉を失いました。その中でも特に印象に残ったのは、ある少年のお話です。少年は建物疎開に出かけ、被爆し亡くなりました。家を出る際に家族に伝えた「行ってきます」という言葉が少年の最後の言葉でした。彼は未来に希望を抱いていたことでしょう。しかし、目の前で全てが崩れ去り、どれだけ苦しい思いをしたのでしょうか。残された家族はどれだけ少年の「ただいま」を望み、「おかえり」と声をかけたかったことでしょうか。私たちにとっての当たり前のやり取りが当たり前ではないことを痛感し、一日一日を大切に過ごしていかなければいけないと思いました。

二日目、広島平和記念式典に参加し、その後被爆された方のお話を聞きました。その中でも「平和は一人のためのものではない」という言葉が特に印象に残りました。自分が幸せだからと言って、周りの辛い思いをしている人を取り残してはいけないという言葉に心を打たれました。
また、その後に行われたグループディスカッションでは、私達にできる「平和を築くための行動」について話し合いました。話し合いを通して、暴力や差別を決して許さない気持ちを持ち続けることや、周りの人を思いやることなど、自分にはまだまだできることが数多くあることに気づくことができました。

私は今回の派遣事業で学んだ戦争の悲惨さだけでなく、私達にできることを周りの多くの人に伝え、自分にできることを行動に移したいです。そして世界の平和を築いていけるように心掛けていきます。

原爆や平和に対する自分の考え

東中学校

1945 年８月６日午前８時 15 分、９日午前 11 時２分。これらの時間は何を表しているでしょうか。この日は、広島県と長崎県に原子爆弾が落とされた日です。これらの時間に何が起こったのかを深く知るために、私は令和 8 年度広島平和式典中学生派遣事業に参加しました。行く前、私は「原爆はアメリカが落として、たくさんの人の生活や命を奪ったのだから、アメリカが悪い。原爆を落とすなんておかしい」と考えていました。しかし、広島でさまざまなものを見たり、話を聞いたりする中で、私の考えは変わりました。広島の原爆資料館には外国人が多く、入口の前では笑っている人もたくさんいました。曾祖父と曾祖母が被爆者である僕にとっては、とても複雑な気持ちになりました。資料館に入ってみると、広島に落とされたたった一つの原爆が、人々にどのような影響を与えたのかについて、たくさんのことが示されていました。焼け焦げた弁当、ほぼ原型をとどめていない自転車、「助けて」「つらい」と泣き叫ぶ人たち。先生や親から聞かされていたこと以上に悲惨な状況を目の当たりにし、生きたくても生きられなかった人たちのことを考えると、言葉になりませんでした。資料館を見終わった外国人観光客たちには、入口で見たときのような笑顔はなく、涙を浮かべている人までいました。その人たちを見て、私は「どちらが悪いか」だけを考えるのではなく、日本とアメリカのどちらにも、戦争に至った理由や責任があるのではないかと考えるようになりました。そして、戦争は一つの国だけの問題ではなく、多くの人の命や生活を奪い、その後も長く苦しみを残すものなのだと感じました。

原爆をいろいろな国が持っているということは、戦争が起きていなくても、本当の意味で平和とは言えないと思います。原爆をなくすためには、国同士が話し合い、相手の考えを知り、認め合うことが重要だと思います。話し合えば、きっと分かり合えると思います。今は話し合うことが難しくても、自分たちの世代から話し合う習慣をつけていれば、自分たちが大人になったとき、争いを避けるために話し合えるようになると思います。今でも、世界ではたくさんの戦争が続いています。もし、もう一度戦争で原爆が使われるようなことがあれば、広島や長崎で原爆によって亡くなった人たちや、今でも原爆による後遺症に苦しんでいる人たちに申し訳ないと思います。今回、広島で見たものや感じたことを忘れず、まずは身近な人の考えを聞き、自分の考えを伝えることから始めたいです。原爆がなくなり、平和になりますように。

「広島を訪れて」

南古谷中学校

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分。広島に一発の原子爆弾が落とされました。一瞬にしてたくさんの人の命が奪われてしまいました。戦争で奪われてしまったのは、命だけではありません。家族や友達と過ごす時間、思い出、夢や希望。このような当たり前の日常までもが一瞬にして失われたのです。

私は「平和な未来を築くために、私たちにできることは何だろう」と考え、今回の派遣事業に参加させていただきました。

広島に着き最初に感じたことは、今現在の広島の街がとても穏やかだということです。人々が生活し、車や路面電車が走り、多くの人が行き交っていました。そこだけを見れば、かつて被爆した場所だとはとても思えませんでした。

しかし、平和記念資料館に一歩足を踏み入れるとその印象は一変しました。平和記念資料館には、原爆の恐ろしさを物語る物が多くあり、深く考えさせられました。まず、心に刺さったのは、原爆で亡くなった方の遺品や写真の展示です。真っ黒に焦げたお弁当には、「いってらっしゃい」という、子を思う母親の気持ちが伝わってきました。焼け焦げた小さな三輪車には、ついさっきまで元気に遊んでいたであろう子供の姿や、それを温かく見守っていた家族の幸せな光景が目に浮かびました。この展示を見て、自分が思っていた「普通」は当たり前ではないことに気づき、一瞬にして日常を奪われた人々のことを考えると、ただただ胸が痛くなりました。それと同時に原子爆弾そのものの凄まじい脅威にも強い衝撃を受けました。爆心地から半径 2 キロ以内のものがことごとく焼失し、多くの人が骨も残らないほどに焼け死んでしまったという熱線の恐ろしさ。さらに、街中の建物を一瞬でなぎ倒した爆風や、戦後も急性症状や後遺症といった重い病気で人々を苦しめ続けた放射線の被害を知り、原爆がどれほど恐ろしい兵器なのか改めて強い衝撃を受けました。

広島訪問 2 日目は、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参列しました。そこで読み上げられた「平和への誓い」が 1 番心に残っています。私たちよりも年下の小学 6 年生が平和について自分の言葉で語っていました。その姿を見て、私は胸が熱くなると同時に、過去の歴史を他人事として終わらせるのではなく、自分たちの問題として受け止めなければならないと思いました。

被爆者が年々少なくなっている今、私たちには、過去の記憶を受け継いでいく役割があると思います。私たちは戦争を経験していません。だからこそ、想像し、学び、伝えていく必要があります。今回の派遣事業を通して、知ることから平和は始まることに気づきました。平和を未来へつなぐのは、今を生きる私たち一人一人なのです。

広島派遣事業に参加して

高階中学校

私は、広島の派遣事業に参加したことをきっかけに、「平和」とは何かを考えることが多くなりました。

今回の派遣事業で訪れた広島平和記念資料館では、穴の空いた制服や、全身に大火傷を負った人々の記録、黒くなったお弁当を目の当たりにしました。そのどれもが、私に戦争の悲惨さと恐ろしさを突きつけてきました。たった一発の原子爆弾は、何百、何万という人々の当たり前の日常を一瞬にして破壊し、81 年という月日がたった今でも、放射線による障害が多くの人を苦しめています。そんな現実が嫌というほど伝わってきました。

私が原子爆弾において一番残酷だと感じたのは、戦後も残る障害と、すべてを無差別に破壊する力です。

原子爆弾は一般市民、軍人、動植物に至るまですべての命を一瞬にして奪い、熱線や爆風、炎により建物は破壊され、体は焼けただれ、皮膚は剥がれました。そして生き残った人々を苦しめた放射線については、なんの症状もないと思われていても、突然、白血病やガンを発症し、多くの人が命を落としました。症状が出るまでの期間がバラバラで、数日後、数年後、あるいは数十年後、いつ、症状が出るかわからない。そんな不安と恐怖の中で送る生活は、考えることさえ恐ろしいものです。

また、今回の派遣事業では、実際に被爆された方のお話を聞かせていただく機会がありました。お話の中で、「みんなで死のう。みんな一緒よ」という母の言葉に絆を感じた、とおっしゃられていました。私はその言葉に驚きましたが、次、いつ第２、第３の大型爆弾が来るかわからない中で、家族バラバラで死ぬより、みんなで一緒に死ぬほうがいくらか幸せだったのだというお話に、胸が締め付けられました。

戦争は決して繰り返してはいけないことです。そして、原子爆弾は、その瞬間だけではなく、生きた人々の心と体に、一生消えることのない傷を残しました。この事実は、絶対に忘れることなく未来に伝えていかなければいけません。そして、平和とは、決して当たり前のことではなく、一人ひとりが考え、守っていくものだということも、今回の派遣事業で知ることができました。今回学んだことを周囲に伝え、未来につなげていきたいと思います。

広島から平和を受け継ぐために

高階西中学校

私がこの広島平和記念式典中学生派遣事業に参加したのは、教科書でしか見たことがなかった原爆の恐ろしさを、自分の目で確かめてみたいと思ったからです。

実際に広島に行って、式典に参列したり資料館を見学したりした経験は、私の平和に対する考え方を大きく変えるものになりました。

特に心に残っているのは、平和記念資料館で見た遺品の数々です。
焦げ焦げた三輪車や、ボロボロになった服を見て、一瞬で当たり前の日常を奪われた人たちの苦しみや寂しさが伝わってきて、本当に胸が苦しくなりました。被爆者の方から直接お話を伺う機会もあり、「あの日に起きたことを二度と繰り返してはいけない」という言葉が心に深く刺さりました。

今までどこか昔の出来事のように感じていた歴史が、今を生きる自分たちに繋がる大切なことだと強く実感しました。

八月六日の式典では、原爆が落とされた時間に全員が被爆者を思い、静かに黙とうを捧げました。世界中から集まったたくさんの人が祈る姿を見て、国や年齢が違っても、平和を願う気持ちは同じなんだと感じました。
それと同時に、戦争から八十年以上が経って被爆者の方が少なくなっていく中で、私たちはどのようにこの記憶を未来へ繋いでいけばよいのだろうと考えさせられました。

広島から平和を受け継ぐために、今の私たちにできることは、決して難しいことばかりではないと思います。まずは、私が広島で見て、聞いて、心から感じたことを、家族や学校の友達にしっかりと伝えていくことです。過去に起きた悲しい出来事を知り、学び続けることが、同じ間違いを繰り返さないための第一歩になると信じています。

広島で受け取った平和のバトンを、私はこれからもずっと大切に守っていきたいです。

悲しい歴史を心に刻み、自分の周りの人を大切にしながら、世界中のみんなが笑顔で暮らせる社会にするために、中学生の私たちにできることから始めていきたいです。

千羽の鶴に願いを込めて

寺尾中学校

今から８１年前１９４５年８月６日、広島県広島市中心部の上空に一発の原子爆弾が投下されました。その爆弾は地上から 600 メートルでさく裂し、住民や建物疎開作業をしていた人々、町並みが一瞬にして消え去ってしまいました。もし、当たり前だった毎日が突然失われたら、大切な人が突然いなくなってしまったら、そんなこと考えたくもありません。ですが私達はこの非人道的な事実に向き合っていかなければいけないのです。二度とあやまちを繰り返さないために。そう思いこの度の派遣事業に参加しました。

２０２６年８月５日、広島平和記念資料館で、８１年前のあの日立ち上るきのこ雲の下で何があったのかを学び、見学しました。当時の日記や写真、絵画からはたくさんの絶望や死にたくない、助けて。そんな魂の叫びが聞こえてくるようでした。焼け焦げた衣服、ぼろぼろの三輪車、黒焦げのお弁当箱からは、そこには確かに生きていた人々の証拠がありました。一つ一つ生きた証を目に焼き付けていくうちに胸が締め付けられ、気づけば頬に涙が伝っていました。

２０２６年８月６日、私達は平和記念式典に参列しました。式典では今まで感じたことのない、あたりの空気が一変し命の重さがひしひしと伝わってくるような雰囲気でした。黙祷の鐘が生命の大切さを訴えるように鳴り響いたことは今でも忘れられません。子供代表の言葉の「平和とは、誰かから与えられるものではなく、世界中の人々で創り上げるものです。」という言葉から、他人事ではなく自分事として平和について考え、より良い豊かな未来のために、あの日戦争で生きたくても生きられなかった人々のために、一人ひとりが命を大切にし平和に向かって歩んでいかなければならないと私は思います。

今、広島の街はとても美しく活気がありどこか柔らかで温かな雰囲気でした。資料館でみた、壊滅的であたり一面火の海だった面影はありません。ですが原爆ドームはまるで時が止まったかのようでした。平和の象徴として、そして核兵器廃絶のシンボルとして、あの日を忘れないようにと８１年前のまま建てられていました。

今回のこの貴重な経験をもっと沢山の人に共有してその一人ひとりが自分なりの平和への思いを考え小さなことでも行動に移し、それが平和への第一歩であるようにと願います。

八十一年前のニッポンについて

砂中学校

今から 81 年前に原子爆弾が広島と長崎に落とされました。この夏、今まで本でしか見ることのできなかったものを、直接この目で見ることができる大変貴重な体験をさせていただきました。川越市と現地の方々に感謝申し上げます。

僕の原爆についてのイメージはものすごい爆発で大勢の方が亡くなったというものでした。しかし、いまいちイメージがわかず、放射線の影響もどのぐらい辛かったのかは事前学習を通してもわかりませんでした。

そして当日、6 時間ほどかけて移動した広島駅には、大都会と平和公園の緑が見えました。僕はその時、そこがとても原爆が落ちた地には思えませんでした。どうしてここまで復興できたのかを考えながら向かったところは資料館です。そこで目にしたものは、ぼろぼろの制服、でこぼこの弁当箱、黒い雨のついた壁などの恐ろしいその日の記憶たちでした。特に、N 家の崩壊という話のコーナーでは、涙が溢れてしまいました。戦争によって日常が壊されたことがどんなに辛かったのか考えると、恐ろしい気持ちになりました。それが 100 年以内に起こっていたと考えるとぞっとして、亡くなった方々の無念を感じました。

実際の被爆者の方である八幡照子さんからもお話をしていただきました。そこで、家族の集団自決などの生々しいその時代の国民意識を知りました。

平和式典では、広島県と市の長の話、子ども代表の話、内閣総理大臣の話、国連代表の話があり、どの話も前日に資料館に行っていたので、心にぐっと来るものがありました。

戦争というものは国家同士の対立で大勢の国民が動いていたということを知りました。その時、どれほどの犠牲が出るかは分かりません。今も後遺症で苦しむ人たちがいる中、戦争の記憶を直接受け取ることのできる最後の世代である我々が出来ることは、この戦争をただの黒歴史で終わらせず、平和への意識とその継続についてしっかり議論するべきだと考えます。

平和の輪

福原中学校

８１年前、たった一発で多くの人々の命を奪った原子爆弾。その光景は、人々の思いはどのようなものだったのでしょうか。
私は、「平和とは何なのか、平和な世界を創っていくために私たちには何ができるのかを学びたい」と思い、この派遣事業に参加させていただきました。私は、この三日間で平和について多くのことを学びました。その中でも、特に印象に残っていることが２つあります。

１つ目は、広島平和記念資料館の展示です。ボロボロになった学生服、死の斑点が出た兵士や全身をやけどした男性の写真など、思わず目を背けてしまいたくなるような悲惨な展示の数々でした。その中でも、一番心に残った展示は、被爆して亡くなった方たちの遺品の展示です。そこには、印鑑や半ズボンなどの物の展示と、遺された方々のお話が書かれていました。この展示を見て、原爆による苦しみや辛さというのは、亡くなってしまった方たちだけのものではないんだということに気付かされました。熱線を浴び、亡くなっていった方はどれだけ苦しかったことでしょう。しかし、家族や友人など、大切な人を失った人もまた苦しい思いをしていたのです。原爆や戦争はすべての人を不幸にしかしないと改めて強く感じました。

２つ目は、平和記念公園を見て回ったことです。原爆ドームや慰霊碑を見学している中、私が初めて知り、興味深いと思ったものは平和の灯です。この灯は1964 年８月１日に点火されてから、ずっと燃え続けています。ではこのまま「燃え続けさせよう」というものなのかというとそうではありません。この灯は、「核兵器が地球上からなくなるときまで燃え続けさせよう」と決められていて、「核兵器廃絶」の強い願いが込められています。

この広島での３日間を通して、私は、「平和な世界」を創っていくためにはお互いの考えや違いを認め合うことが大切だと考えました。一人だけで世界を動かすことは難しいけれど、一人ひとりが周りの人達を大切にして、その輪を広げていけばとても大きな力になると思います。だから、私はまず目の前にいる人を大切にしようと思います。

広島で受け取ったバトン

大東中学校

「胸がぎゅっと苦しくなりました。あまりの衝撃に、一瞬目を背けるほどでした。」

今年の八月、私は『広島平和記念式典中学生派遣事業』に参加しました。参加する前までの私は、戦争や原爆のことを、教科書で見るだけの「昔の遠い出来事」だとしか思ってなく、どこか他人事のように感じていました。しかし、広島の平和資料館に入った瞬間、その気持ちはがらりと変わりました。

想像できないほどの熱や風のせいで、皮膚が焼けただれて、ボロボロになって歩いている人たちの写真や絵が並んでいました。その姿は、言葉を失ってしまうほど怖かったです。そして、展示されているボロボロの服などの説明を読んでいるうちに、ただれた皮膚で苦しみながら亡くなっていったのは、今の私と同じくらいの普通の学生たちだったんだと気づきました。その子たちが、一瞬で日常や未来を奪われてしまった事実を知って、ショックで言葉が出ませんでした。

八月六日の午前八時十五分、私は式典に出席し、黙祷を捧げました。広島の街全体がシーンと静まり返った空気の中で、原爆により、ただれた皮膚の人たちのことを思い出していました。そして、「こんな怖いことは、絶対に二度と起きてほしくない」と、心の中で強く思いました。

今回の事業に参加する前の私は、今の生活を毎日過ごせることが当たり前で、平和について深く考えたことはありませんでした。しかし、今の私は違います。原爆の本当の恐ろしさを、この目で見て、肌で感じてきたからです。

私は式典に出席したことで、大切な大切なバトンを受け取ったんだと思います。平和を守るというバトンを。絶対に繰り返さないために、まずは広島で見てきた現実や感じたことを、家族や友達に自分の言葉でしっかり伝えていくことです。そして、日常生活の中でも、友達と意見が合わなかったり、イライラしたりしたときに、感情に任せて怒るのではなく、まずは一歩引いて相手の話を聞き、自分の気持ちを言葉できちんと伝えることから始めていきたいです。自分の周りから争いごとをなくしていくことが、世界を平和にすることに繋がると思っています。広島で受け取ったバトンを次の世代へ繋ぐために、私は自分にできることを進めていきます。

広島で学んだこれからの未来

大東西中学校

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分。広島に一発の原子爆弾が投下され、多くの人々の命、そして人生が失われました。全身のいたる所の火膨れがやぶれて火傷した皮膚が垂れ下がり、放射線の影響で髪の毛が抜け、病気や怪我などの偏見で差別をされ、戦時中もその後も心身ともに苦しみながら生活をしてきた人々がいます。私は戦争中の人々の生活や戦後の放射線や差別による苦しみについて、より詳しく学びたいと思い、この事業に参加しました。

１日目の平和記念資料館では写真や絵、そして実際のものを通して戦争の苦しみをより深く感じることができました。私が特に印象に残ったのは「死の斑点」です。これは放射線の影響によるものでした。原爆から生き延びたのにもかかわらず、放射線のせいで歯茎からの出血が止まらず、顔や上半身に無数の血の点が現れました。そして、その 2 日後になくなってしまったそうです。死が迫りくる恐怖をとても感じました。それが実際、当時の人々の身に起こっていたのだと思うと、言葉を失います。原爆は落とされた瞬間だけでなく、その後もとても苦しいものだったのだと改めて感じました。

そして２日目の８月６日、私は広島平和記念式典に参列しました。「もしも大切なものが一瞬で消えてしまったら、どんな気持ちになるのでしょうか。」という言葉が深く心に残りました。今の私には想像することができませんでした。毎日一生懸命勉強して、友達と笑い合って、たくさん怒られて、という当たり前で穏やかな日常の中にいるからです。この当たり前の毎日こそが、実はとても幸せで、守らなければいけない「平和」そのものなのだと感じました。

現在、実際に戦争を経験した人はとても少なくなっています。だからこそ、広島を訪れて戦争の恐怖を知ることができた私達がみんなで語り継いでいく必要があると思います。また、世界平和からではなく、身近な平和を築き上げていくことが明るい未来への一歩だと思います。私はこれからも平和を願い、自分にできる行動を心がけていきたいです。

八月六日に起きた出来事

霞ケ関中学校

昭和 20 年(1945 年)8 月 6 日、午前 8 時 15 分。広島県広島市に原爆が落とされ約 14 万人の命がなくなりました。私は原爆が落とされたときの光景を実際に見たわけではありません. 80 年前の出来事です。しかし今でも原爆によって傷つけられた人々の傷はなくなることはありません。そして今も原爆によって苦しんでいる人は数多くいます。私がこの広島で特に記憶に残っていることが 2 つあります.「原爆の子の像」と「被爆体験講話」です。

1 つ目は「原爆の子の像」です

私たちが平和記念公園を見学させてもらっていたときに「原爆の子の像」を見ました。この像には原爆で犠牲になったすべての子供たちへの慰霊と、二度と戦争のない世界平和を築くという強い願いが込められています。そして特に印象に残っているお話がこの像のモデルとなった「佐々木禎子さん」についてです。禎子さんは 2 歳の時に爆心地から 1.6 キロの場所で被爆しました。12 歳の時に原爆の放射能が原因で白血病を発症し、回復を祈って折り鶴を折り続けましたが亡くなりました。禎子さんの同級生は禎子さんと亡くなった子供たちをなぐさめるため、像を立てようと全国、世界から寄付を募って像を建てたそうです。「原爆の子の像」の出来事を知って私は原爆とは時間関係なく体を蝕みそして死に至らせる残酷なものだと知ることができました。さらに子どもでも世界に原爆の悲惨さを伝えることができるということを知ることができました。

2 つ目は「被爆体験講話」です

私たちは 2 日目に全国平和学習の集いで被爆した方からお話を聞く機会がありました。お話をしてくださった八幡照子さんは八歳のときに爆心地から 2.5 キロ離れた家の裏庭で被爆されたそうです。朝食後八幡さんが家の裏庭に出たとき原爆が投下され、伏せようとしたときに気絶してしまいました。母の叫び声で気が付き八幡さんは 5m ほど吹き飛ばされていたそうです。母が掛け布団を家族の上に広げ「みんなで死のう！　みんな一緒よ」と言い家族みんなで肩を寄せ合った時の家族の温かさ、家族の絆は今でも忘れないと言っておりました。それに私は親の、家族を守るという思いの強さ、家族との絆が素敵だなと思いました。

広島の街は復興し、とてもきれいな街になっています。しかし、街が元に戻ったからといって、失われた命や人々の心の傷まで元に戻るわけではありません。だからこそ、私たちは原爆の悲惨さを忘れず、いま平和に暮らせることへのありがたみを感じ、同じことを二度と繰り返さないために、いま一人ひとりができることを考え、平和の大切さを次の世代へ伝えていく事が重要だと思います。

過去を遠ざけないために

霞ケ関東中学校

広島に原爆が投下されてから８１年という歳月が流れました。【８１年】という時を重ねた悲惨な過去。戦時中ということもあり、普通の暮らしもままならない中でたった１つの原子爆弾によって広島は地獄のようになってしまいました。

多くの方々が亡くなり、現在も被爆された方はいつ死ぬかわからない不安を抱えながら生きています。しかし、この広島平和式典派遣事業に参加して驚いたことがたくさんあります。かつて、すべてが焼け野原になった街がわずか８１年という時間の中でゆっくりと確実に復興を遂げており、そこには人々の「街を復興させたい」「記憶を残したい」という強い努力や想いがあると感じました。

派遣事業の１日目には平和記念資料館を巡り、原爆がどれほど破壊的に人々に絶望を与えたのかを深く学びました。特に印象に残っているのは人や物の影がはっきりと残っている資料です。原爆が炸裂した瞬間の強烈な熱線が周囲を変色させた一方、人体や物が光を遮った部分だけが元の状態のまま残ったと言われています。当時の凄まじさを肌で感じる貴重な経験でした。

２日目には平和記念式典に参列しました。８１年前と同じ時間、８時１５分、全国から集まった人たちと一緒に黙祷を捧げました。午後には「平和を考える集い」に参加し、全国の中高生や広島の皆さんと、どうしたら世界が平和になるかについて話し合いました。この経験を活かして、本校で令和９年２月に実施される修学旅行に向けて、学年で平和学習に取り組みたいと思います。

３日目は広島から川越へ向けて出発しました。はじめは原爆の被害について知る派遣事業だと思っていましたが、実際に原爆ドームや平和記念資料館を見学することで、学校の授業では分からなかった広島の歩みについて学ぶことができました。この経験から川越との違いや歴史を見つめなおし、広島との違いを事前学習でできればよいと思いました。

最後に、平和のために僕ができることは、この３日間で得た経験を自分の中だけに留めるのではなく、周りの人たちにも伝えていくことです。この学びをこれからたくさんの人に届けていきます。

戦争の末に

霞ケ関西中学校

1945 年、この年は日本にとっての転換期であり、同時に日本が悲しみと混沌に陥った年でもありました。私は現地に訪れることで、その悲惨さを物語るものを目の当たりにしました。

私たちは、広島県に到着してすぐに「平和記念資料館」へ行きました。そこで目にしたのは、衝撃的なものでした。「中のボルトが溶けて曲がってしまった橋の一部」や「穴の開いた水筒」、「ボロボロになった学生服」などが当時のまま展示されていました。その他にも、皮膚が焼けただれた人が水を求めてさまよっている絵画や放射能により汚染された黒い雨の写真など、当時の悲惨さが感じられる資料が多数見られました。この恐ろしい原爆が、無差別に襲ってきたのかを考えると、とても怖く感じました。

２日目は、平和記念式典へ参加しました。式典では多くの人が集まり、厳粛な雰囲気で行われました。各代表者のスピーチからは、亡くなられた方々への思いや戦争を根絶させようとする強い意志を感じました。私は記念式典に参加して、当時の惨状や悲しみを知りました。

そして、今後同じ悲劇を繰り返さないようにするために、これからの私たちにできることは何なのか考え、大切なことに気が付きました。それは、これからの社会を担っていく戦争を知らない私たちが、原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さ、平和の尊さについて理解する必要があるということです。過ちを繰り返さないために、後世に伝えていくことが大切だと感じました。平和に対して自分の考えを持ち、大人になっていくことで、未来の平和につながると思います。そのために、本事業に参加した私は、原爆の悲惨さや平和の尊さを伝える努力をしていきます。

最後に、私には長崎に親族がいます。その中には、原爆によって被爆した人がいます。原爆によって亡くなった人や残された遺族がいることを、決して忘れないでいてほしいと願っています。この歴史的事実を風化させないことが、私たちの役目であると思っています。

一枚の学生服

川越西中学校

今回、広島平和記念式典中学生事業に参加して、戦争や平和について改めて考えることができました。以前は広島で起きたことは少ししか知らず、どこか昔の出来事のように考えていました。しかし、実際に広島平和記念公園や資料館を訪れてみて、原爆がどれだけ多くの人の人生を変え、多くの悲しみを生んだのかを知り、改めてその恐ろしさを実感しました。特に資料館で見た「被爆した中学生の学生服」の展示では、自分たちが着ているような名札やボタンの付いた普通の学生服、ただの学生服がたった一発の原爆であんなにボロボロになった姿を見て、とても衝撃を受けました。きっととても大切に保管していた服なのでしょう。まったくと言っていいほど形がくずれていませんでした。原爆は昔の出来事だと思っていた考えは変わりました。私と同じような年齢の人たちの日常や大切なものを突然奪った出来事だと、この一枚の学生服から知ることができました。原爆が落とされた時、人々は何が起きたのかもわからず、一瞬にして日常が奪われました。被爆者一人一人にも大切な日常があったはずです。そんな原爆の恐ろしさを知った私は平和の概念を考え直すようになりました。戦争が起きないなら平和なのではなく、今を何気なく過ごすことができるからこそ平和なのだと気づくことができました。私たちが平和を目指すためには元気に今を生きて日常を過ごせることが、「当たり前」だと思わないことが大切だと思いました。今思っている「当たり前」が誰かに壊されないよう、自分たちで守っていかないと平和は続きません。以前の私はこのことを知りませんでした。私は今後「当たり前」の大切さをみなに知らせ、自分たちの平和を守っていきたいです。

「平和を願って」

名細中学校

私が広島平和記念式典への中学生派遣事業に参加して経験をしたことが３つあります。

１つ目は平和記念資料館の見学です。そこでは被爆資料や遺品、被爆者の証言などが展示されていました。展示されている物は何もかもがボロボロになっていて、人は全身のいたるところに火傷、水ぶくれができ、痛々しい姿になっていました。それを目の当たりにした時、被爆地の状況、被爆者の状態、心情など、どれだけ悲惨な目に合ったのだろうかと心を痛めました。

２つ目は平和記念式典への参列です。そこでは現在戦争中のイラン、イスラエル、ウクライナを含む１２０カ国以上が参加していました。特に印象に残った言葉は、広島市長が言っていた「戦争の記憶が薄れることで核兵器の使用が容認されかねない時代を生きる私たちは、今改めて、国連を創設し核兵器廃絶を決意した過去の教訓を学び直す必要がある」という言葉です。私は、この話を聞いた時、核兵器のない社会を理想で終わらせないために、一人ひとりが戦争を知り、平和への考えを持ち、小さな行動を積み上げていくことが大切だと思いました。

３つ目は全国平和学習の集いです。そこでは、８歳のときに被爆した方の話を聞いたり、グループ・ディスカッションをしたりしました。被爆者の方は「戦争は人の命を武器に変えるようなもので、もう二度とあってはならない」「二度と繰り返さないために話し合い、コミュニケーションを取ることが大切だ」ということを話されていました。また、「原爆や戦争の悲惨さを学んだ上で、私たちが日常にできる’平和を築く行動’はどのようなものがあるか」を課題にグループディスカッションを行ったときに、私は、国家・地域・家庭・私たちの行動がすべて関係し合っていると考えました。私たちができる小さい一歩として、自ら挨拶をする、コミュニケーションを取る、意見が合わないときは話し合って相手を理解しようとすることから始めていきたいと思います。

これから日本を、世界を平和にするためには私のような戦争経験のない人たちがしっかり過去の日本を知り、向き合い、平和につながる行動を常に考え、相手の意見を否定せず、受け入れることが重要になってくると考えました。

「一生忘れない三日間」

鯨井中学校

1945 年８月６日午前８時 15 分、たった１発の原子爆弾が何万人もの尊い命を奪いました。

2026 年８月５日、平和記念公園を訪れ、公園内を見学しました。資料館には、原子爆弾が落とされる前のたくさん家が建っている明るい広島と落とされた後の焼け野原の無残な広島の写真が壁一面に載っていました。その他にも原子爆弾を受けて、ボロボロになった服や靴、当時使われていた医療機器など、たくさんの物が展示されていました。そして、資料館には、ものだけでなくその時生きていた人たちの気持ちの言葉も載っていました。私が資料館の中で、一番印象に残ったことは、「黒い雨」です。黒い雨と聞いて想像することはできるでしょうか。当時の広島では、ほとんどの人が水に飢えていました。そのため、雨が降ってきたのは大いに救いだったと思います。乾いた喉を潤すために多くの人がその雨粒を飲みました。しかし、その雨は、放射性物質を含んでいました。そのため、それを知らずに飲んでしまった人たちは、高熱や腹痛などの様々な症状に苦しみました。この残酷な出来事に対し私は、改めて広島に原爆を落とす必要はあったのか考えました。

８月６日私達は、平和記念式典に参列しました。８時 15 分その場にいる全員が起立し黙祷を始めました。私は、亡くなった方たちや今も後遺症に苦しんでいる人たちのことを思い、暴行ではなく言葉で解決し、今後のこのような出来事が起きないように祈っていました。その後の挨拶では、内閣総理大臣を始めとした広島県知事や国連連合事務局長のお話がありました。その中で、「人類は核兵器とは共存できない」という言葉があり、私は共感をしました。アメリカでは、”仕方なく”撃ち落とされた原子爆弾。しかし、日本には、”仕方ない”という言葉では片付けられないほどの被害がありました。この変わらない事実に対して私はどうして相手の気持ちを考えなかったのだろうと思ってしまいました。

この事業の中では被爆者のお話がありました。私は、当時の広島について １番知っている人からお話を聞くことができました。しかし、語り継ぐ人がいなくなった時にまた、同じ過ちが起こるのではないかと思いました。そのため、この事業で学んだことを１人でも多くの人に伝えたいと思いました。

「平和」とは

山田中学校

「戦争」の対義語は「平和」だと言われています。

私は戦争が無いことを平和だと思っていましたが、この２泊３日の広島派遣事業に参加して、その考えが変わりました。

１日目は、平和記念公園を回りました。まず初めに行ったのは資料館です。私は事前にどんな物があるのか軽く調べていましたが、やはりスマートフォン越しで見るものと、実際に被爆したものを目の当たりにするのでは、感じるものが大きく違いました。実際に被爆して複雑に折れ曲がった鉄骨、黒く焦げたお弁当、金庫の中にあった本が炭化したもの、食器などが溶けて一つになったもの。さらには、爆風で飛ばされたガラス片がコンクリートに突き刺さっているものもありました。この一つ一つのものが、原爆の恐ろしさを教えてくれました。そして私が資料館を回った中で印象的だったのは、被爆した後のヒロシマの様子の絵や、被爆者の方の写真です。人々の皮膚は垂れ下がり、手を前に伸ばして水を求めるように歩く様子。あたりは火や遺体で包まれ、親が子どもの手を引いて逃げていく様。まさに地獄のような景色でした。また、来館している人も、ここの展示は息を呑んで足を止めていました。やはり、実際に起こったことを見ることは大切だなと思いました。そしてその後、平和記念公園をガイドさんと一緒に回りました。自分が見ている川や、原爆ドームは８１年前もここにあって、被爆を経験しているんだなと思うと、信じられないという気持ちが強かったです。

２日目は平和祈念式典に参列しました。８時１５分、平和の鐘が響くとともに私は黙とうをささげました。１日目で見た原爆の惨状が、もう二度と起こらないようにと強く願いました。その後、全国平和学習の集いに参加しました。私は、この３日間の派遣事業の中で一番心に残っているものが被爆者である八幡照子さんのお話です。実際にその人が体験したことを直接聞くことは、とても大きな力があるなと実感しました。その八幡さんのお話の中で強調されていたのは、「対話」です。対話ができると戦争はなくなる、と八幡さんは仰っていました。そして質疑応答の時間で、「平和」とは何ですかという質問に、八幡さんは「世界中の人々が幸せだと思えたら。」と回答されていました。そこで私は「平和」の価値観が変わりました。ただ単に戦争がなくなるのが平和ではない、みんなが幸せに暮らせることが「平和」なんだと思いました。

今回の派遣事業を通して学んだことや、考えたこと、感じたことを自分の周りに伝え、自分たちからでも「平和」を築く行動ができたらいいなと思います。

また、年々戦争を体験した人の数は減っています。戦争の恐ろしさや原爆がもたらす悲劇を私たちが次の世代に伝えて平和への意識を高めていくことも大切にしたいです。









川越市マスコットキャラクター

ときも

令和８年度　広島平和記念式典中学生派遣事業

報　　告　　書

令和８年１０月

川越市　総務部　総務課　総務担当
〒350-8601　川越市元町 1-3-1
℡049-224-5550(直通)